

令和2年度 国立夜須高原青少年自然の家 教育事業報告  
イングリッシュキャンプ「そうだ、せかいはひろいんだ！」

## 1. 趣 旨

持続可能な開発目標（SDGs）達成への取組が、国、企業、消費者に急速な広がりを見せている状況下で体験活動の重要性も指摘されている。また体験活動を通じたESD（持続可能な開発のための教育）がSDGs達成に資する役割は大きいと考えられている。

そこで、本事業における国際交流、異文化理解を通じた体験が、子供達の外向き志向を育み、持続可能な社会の創り手の育成の一旦を担うことに貢献するとの観点から、本事業の目的を次の2点に定め、体験の場と機会を提供する。①子供達の外国及びその文化等に対する興味・関心を喚起する。②子供達と世界各国とのつながり意識を涵養する。

## 2. 主 催

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立夜須高原青少年自然の家

## 3. 運営協力

コミュニティカフェみなみ舎（朝倉郡筑前町）

## 4. 開 催 日

①12月6日（日）、②12月19日（土）、③12月20日（日） 各日10：00～14：30

## 5. 会場

国立夜須高原青少年自然の家ディスカバリーハウス

## 6. 参加者及び対象

小学生を含む家族

参加人数	幼児	小学生	中学生	保護者等	合計
	7	19	1	23	50

（3回分の合計人数）

## 7. 内 容 ※各回同内容で実施。

### （1）外国語で挨拶しよう

初回の緊張をほぐす活動。日本語の挨拶は英語や各国語でどう言うのか、書くのかを体験し、日本語以外の視点を持つきっかけづくりのための活動を行った。

### （2）コミュニケーションのための基本英会話ミニ講座

今日一日のコミュニケーションで必要となる基本的な英会話や調理に使用する英語についてのミニ講座を行った。（写真①）

### （3）講師の母国紹介

講師の母国（フィリピン、タイ）の概要や特徴などについてのスライドを活用した紹介を行った。

### （4）Local Food～各国の家庭料理をつくろう～

講師の母国（フィリピン、タイ）の代表的な家庭料理（フィリピン：ボラボラ、タイ：ガパオライ

ス)を作り、食を通じた異文化体験を行った。この時間のコミュニケーションは英語を基本とし、スタッフが支援しながら調理実習を通じ、体験的に楽しく英語を学んだ。(写真②)

(5) Local Games～各国の遊びで楽しもう～

講師の母国(フィリピン、タイ)の各国の子供達が日常親しんでいる遊びを英語で体験した。日本の遊びとは違った面白さを他言語で体験する機会になった。(写真③)

(6) 省察活動

活動全体を振り返って、講師への質問や感想等をまとめる活動を行った。

(写真①)

(写真②)

(写真③)



## 8. 成果等

### 《概要》

当事業は、他文化の調理や遊びを体験する中に英語学習の要素を取り込むことで、海外への外向き志向を涵養し、そのための手段となる英語への学習意欲の向上を図ることを志向する構成とした。以下、アンケート調査結果の分析等からその有効性を検討した結果、当事業の構成は有効である事が推察された。

### 《アンケート調査結果及び分析》

参加者(子供)の意識の変容を把握するため、事前・事後のアンケート調査を行った。事前・事後調査の共通7項目の各回答について、「とても思う」:6点、「思う」:5点、「少し思う」:4点、「あまり思わない」:3点、「思わない」:2点、「全く思わない」:1点として、小学生以上の参加者かつ有効回答の18人分の平均点を算出し、事前・事後の結果を比較した。その結果、全ての質問項目で、事後の平均点が上昇していた。

これらの平均点上昇について、統計的有意差を検証するため、エクセルによる対応のあるt検定を行った。その結果、Q1「あなたは将来外国へ旅行に行きたいと思えますか?」、Q2「あなたは将来、外国の学校で勉強したいと思えますか?」、Q5「あなたは、外国の人と仲良くして、たくさんのことを学んでみたいと思えますか?」、Q7「あなたは、初めて会う外国の人に自分から話しかけたり、仲良くしたりしたいと思えますか?」で有意差を確認した。〔図4～図10〕

更に、分析サンプル数が18と小さいことから、サンプル数に影響を受けずに活動の効果を検討できる数値である効果量(Cohenのd)を算出した。その結果、Q4「あなたは将来、世界のいろいろな人たちの役に立ちたいと思えますか?」を除いた全ての質問項目で効果が認められた(表-1)。なお、Q4については、事前の調査結果の平均点が高得点であったため、t検定による有意差及び効果量計算における効果判定でそれぞれ有効性がなかったものと推察される。

なお、事後アンケートでは、満足度の他、達成感等に関する3つの質問を行った。Q8「あなたは、この事業で、外国の人との交流、違う国の文化を学んだり、体験することが出来ましたか?」、Q9「あなたはこの事業に参加する前と後を比べて英語に興味を持てるようになりましたか?」、Q10「この事業に参加した満足

度はいかがでしたか？」は全て、回答の肯定率が100%であった。このことから、Q1～Q7の質問で測った項目の有効性が推察される。

図-4

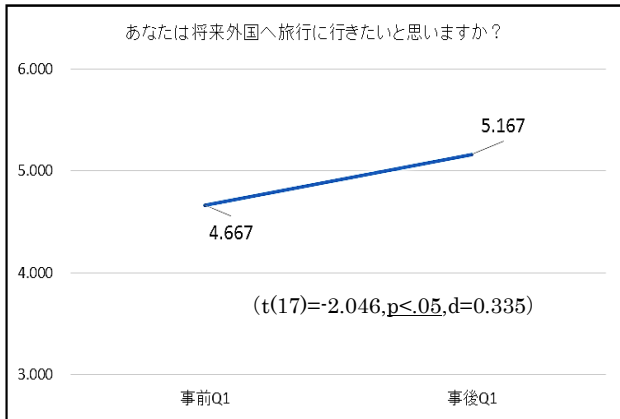


図-5

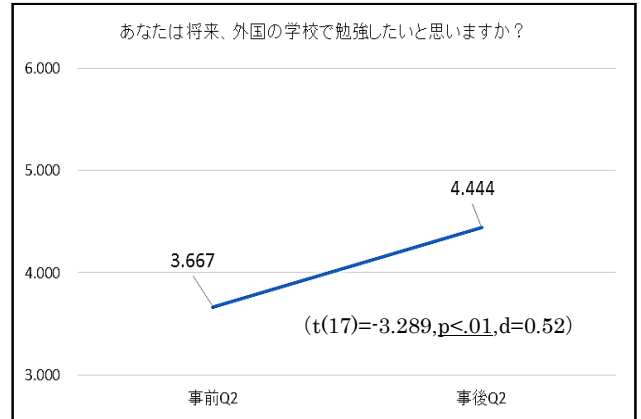


図-6

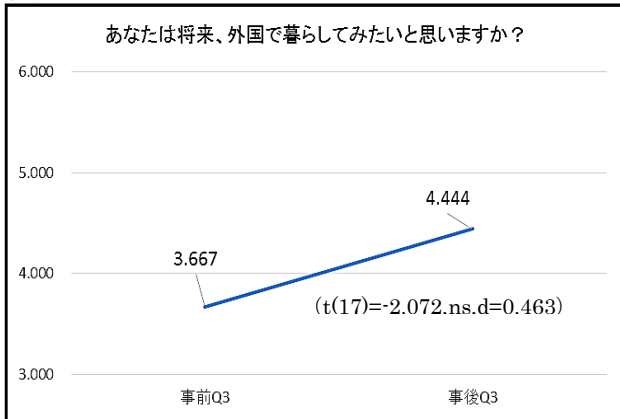


図-7

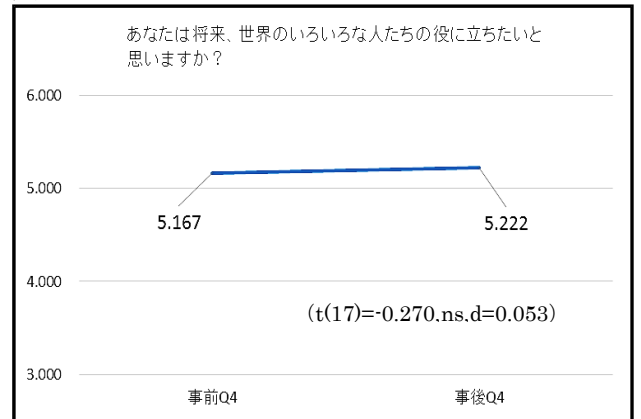


図-8

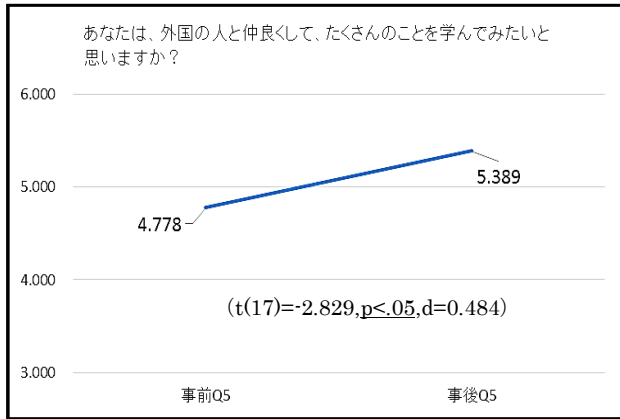


図-9

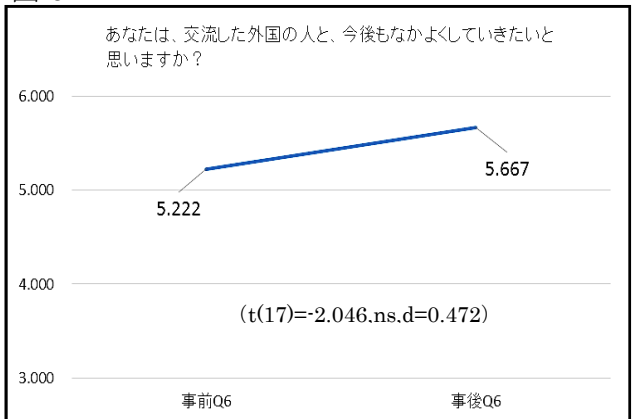


図-10

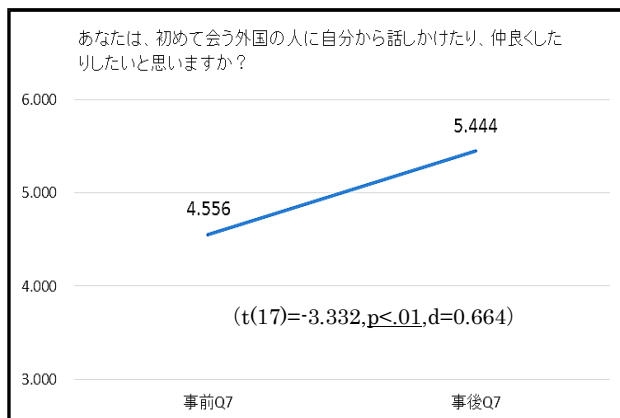


表-1

効果量計算結果及び判定一覧		
設問	効果量	判定
Q1	0.335	効果量小
Q2	0.520	効果量中
Q3	0.463	効果量小
Q4	0.053	効果量ほとんどなし
Q5	0.484	効果量小
Q6	0.472	効果量小
Q7	0.664	効果量中

### 《アンケート自由記述からの考察》

参加した子供達からは、「外国の遊びができて楽しかった」や「国の紹介で色々な国のことを知る事ができた」など、外国や異文化等に対して興味関心を深めることができ、本事業の目的に沿ったプログラム展開ができたと考えられる。また、「外国の方と生の英語を話すことができ、もっと英語を勉強したくなった」との回答から、海外の方と直接関わることは、外国語学習に対する動機づけにもなり得ると思われる。

参加した保護者の「日常生活で外国の方や異文化に触れることが殆ど無い」という回答から、日常的に外国語に触れる機会の少なさをうかがい知ることができるが、「子供達には少しでも苦手意識を無くして欲しい」という回答から、外国の方や文化に触れる体験の場や機会のニーズや本格的に開始する外国語学習に対する期待も見受けられる。また、「子供達にとってもグローバルと関わる良い機会になりました」など外国語を単なる外国語学習として学ぶのではなく、料理やゲームを通して行い、身体を使って英語を覚える「体験型プログラム」に対する好意的な意見も見受けられた。

「次回も開催されることを望みます」や「また是非参加したいです」との声から、保護者は国際交流の必要性を高く持っていることが推察できるものとなった。

### 《参加者のエピソード》

自身がこれまで学習してきた英語を駆使して拙いながらも一生懸命、楽しく講師とコミュニケーションを取る子供達の様子を随所で見る事ができ、学習と体験の一致による学びの深まりを得られる機会や場の重要性を認識することができた。また、活動中に子供が母親へ「実はとても英語が好きで、海外のことにも興味があり、将来は海外留学したいと思っている。」と発言した。母親はこれまで我が子がそのように思っていることを知らずにいたので嬉しい発見だったという。こうした事業機会があったからこそ、親子で海外に向き合う時間も得られたのではないだろうか。

## 9. 今後の課題等

- より多くの子供達に異文化の体験をさせる機会や場を提供する観点から、開催回数の増加や定員の増加について検討する余地がある。ただし、コロナウィルス感染防止対策を鑑みると今回の定員数が上限であり、開催回数の増加の検討が必要である。
- 次回開催に向け、今回の成果を踏まえながら、自然の家という自然環境等の立地を活かしたアクティビティの作成及びプログラムの構成について、協力団体等との検討を進める必要がある。